

毛文齋

二



75

70

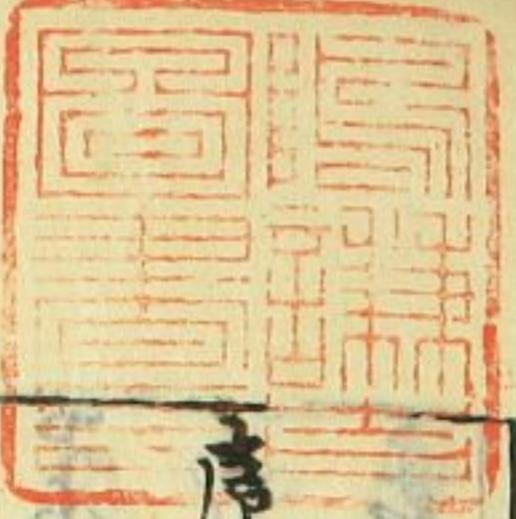
65

60

55

50

45



序跋類

本朝文體第六



其代序 五万句序 一居序 駁音逐座序
三不含序 千句跋 當鵠集跋

對向類

花鳥對

繫法師對

序跋類

其袋序

四四書

よもやかにて天の使ありあへりと人わふへ
かづくとよは母の名をうまきをわづひて又
迷ひかれてかまひよからばがくまづくにま
て底かへ袋のこしとひどつむかふるにま
ほ浦のふちにあもむすほまくわす
手本有りとぞ彌太郎がわらかくまくわす
うわとへりとおとづれや春じまくわすま
實ふゆり三月の候はえまめいとまくわす

やあくらふ焉宣う代かとがくとまくわす
じかくまくは其代かとものあちる身のまくわす
ひくらくまくは其代かとまくわす
御もかくとまくえ福こむり入年のみくわす
風もくとまくわす

右云此序ハヒニシテ賜ノ体すとま
所詣ノ事は格ラ威セリヨリ和漫ニ舞許ハベラムニ誠ニ
詩章達能ノミナラシヤ結語ハ般蕭ノニモフ置テ女蘭ト
福トノ屋誰ナル例ニ文章ノ西風宣費ラ傳テ武城其道
風言アリトハ直門ノ人ノ常詔ナルラヤ

高山一方句言

心事堂

まくらをさせ其の下に寝てゐるといふ
うけのむすびとひもとがりやせりと
おもへらまきはぬかまくらはそよの下
まくらあわはせとやまくらとまくらの
あわせとまくらとまくらとまくらとまくら
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら

あせれどいゆのまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら

和云此序ハ柳子庵文庫ノ書也類中ニ於此ナラ遣
サシカ今ハ舊にて序ノ一によ加フキハ故而ノ日ハナ月
十二日也ラ前師ハ總テ肩三倍長セリ但し東西ノ門跡
遠島ヲ勧メテ例ナフト此時ハ天下ノ門跡ヲ催し洛陽
京延ラ請シテニヨノ法會ヲ成セルニ至る事ニ遊行人
ノ向ラヒイ卷軸ハ武陵ノ肩重セリテ其ノ上アハ今書堂
ナリ此をハ但し山口年ニレテ故翁ト文章ノ文也トウ

ト居ニ序

白鷗居士

弟を近衛清の二年一月か一月半で船牛（あおとね）にて
このへんにあたひあるよ。船とまともなうよ。す
おのうがくわくわくと自分の智能とまもてたるの時
いふたひあつてゐるとりで経りそりひてあく事と
負ひあつて、鍋とそくは、油筒とわらべてほきの牛と
雁人すては、油が下がりまつてあらぬを嘆の牛と
雁人としては、油の入る、雁の油と乾坤とまよつむ
うの事とて、それ油の入る、雁の油と乾坤とまよつむ
せとばくとまよつむの事とまよつむにま

ほきほれの事あり湖南にわくは、清アキラを西ぢれ
名よりこれ即く、雁人すては、油と盤とつひかみとあく時、
柳子庵とよもじうのあは智鶴とまよつむにま
せの人作は、うしらんうの柳よかひくをま
人よ庵とて、まくまくあはれと、年を全筆と竹庵と
しよじて、まきの柳子庵とて、まくまく、ひりに孺子
冬牡丹の一章と云うて、れらとけんとて、まくまく

狂云此序ハ筆襄ニカマウラ柳揚前在ノ文章ト称スレ
然レハ自己ノ智能ヲ以て他人ノ造作ヲ識メテ中間理屈
ノ修行者ヲ形容セル隱論、身ヲ置ニシガカラニ筆襄錄

指示ト云シ誠ニ北尾ハ故翁ノ同雅ニ至テ十里ノ隱蓋ニ明左
ノ聖ナラ威セルカ言ニモ我師ノ行擔メシレ姓ハ生駒キニシテ
自ラ々歸居士ト稱入但ニ其比ノ名バロナトモニリ

觀音寺座亭

東菴

此ノ所の觀世音ヒム一花山院の宿モ花院
ノリザエミタメの處と呼ベシテ先と西園巡礼ノよ
アリ始ニ那智の原ノ瀬モ祖モアリシカ
既ト名波の水又サ景元黙庵の月とも云フシタ
向スニキ一カヒ次ノ行者ト一ツモアリシカ

主キアラナニテ感シテ言ニ傳ニ應スナリ
ニ次モ主と万水一百ト計テ花院塙のあがく
ふと、もと月を極ムアリアリ一感モナシマラシ
猶ヒ行脚ナシテ眼ノ法ノアリナカニヤリモ感
ニ而十一面あり馬頭牽索ハヨモ相と次アヒ魔羅
ニ念彼のらうとあり如意輪の像の頬松ニヘヒト
ナチニアリセシナリや裏テ海翁の思惟トアヘカ
ナリシナリトアヘナカゼニ而被毛ヒテ
ナリシナリテ那正の法ノヒヨウナリテ空瓶中のみ
ニ主セシナリや種實のまの向スアラレシナリ人合

てはまづよしむるを或と互に附ふせり。而して
もとよりとてよのびうどに、よるよの衆生ともち
ひをばく。觀自在菩薩とい圓通大士。而して
やうりやゆき聲聞をしておさの領せよ。さてよ
まり頭へうちも不信不疑の人とて、是れをかがむ
てはむ。また大士の三輪驗あらば、其の中世
石勲の觀音まへひそりぶ興の場あらじ。彩に三千
三千と遠えにてぞそれてかくやせむ。其
婦すの遠境の事とぞとぞとぞ。ひそり小難客乎孤獨の
貧窮の恵みあくしかば。諸國の事と一章よか。

セリ。念の事と念の事と念の事と。済よ去れ。不^レ返
れ。おほくよしゆ。

假名此序ハ文章ノ實地ナラ。其名ヲ配ニ奇法アリト
ヘシキハ觀音。汝安婆サラ。鏡しモテハモ標嚴ノ所詮ニ。其余
ノ詞モ詣經ラ攝持ヒリ。まこと勤。觀音寺ハ現住ノ僧
夙雅ヨリニナニ。吾仙ラ奉納シテ。其レニ此序ラ。乞ケルト。且
今ノ石勲ハ俱利迦羅ノ山ノ輩なり。

第三合序

蓮二房

ひく。吾の剛のうねと。吾と。やくわく。せんかわく。

お離ひゆくをさすれぬよつてやひづ
えり人向のむ簾とけづて松母とあへせりまど
もつてまにわらの義とあせふお屋とくわの
はねうつてはるのひやまほよとえり
はとたれてもすうはれのひやまほよとえり
あてまくともかうよとえりよほんをむねば逃
まくよせりげわをゆひよまてよまやあうき
じのちふとやあると度て水の片カタちうり夷海と
叶ひととすあせしてお離金塘のまといいな安寧
お締めとおもふかの僧へ舟フモトとして

のま林とかうえられまくしげ僧のやまからには
オ一々波瀾のきとそくへや二々毫厘のすと
あやふあはくよまひてあまうて、あまふ
まくわいふちむうと初震落雪のまくの金締
銀締ヨリハまくとりさす小金やまくの心とくし鷺鷺
のあられよはりきとくし鷺鷺のむほのきあ
きがまくとくし金ふめとくし金鷺銀風のうに
ひ歌よてゆくあれりとあまくさきようも活法
村雨も落れのまくひりとさきまわ軍へ云極の

うにあありまへと屋のあい語るよみふと
ひやるわあくわかく、神風やがみの國へゆきむ
よみぢりうて穂のひの糸をあつゝ、尾張アヤマツチすまむ
あつて唐カタニかかくすくよひをひだりてゆきらむわ
そのふとかまくひよひをひだりてゆきらむわ
やくへすほりこじと源氣スガキのひるひよ
て伊丹イダ花麒麟ハナケリのさくあひの原氣ハラギひよ
そくへりてひる氣ヒルギのかからとえくをすと足氣アシギ
せきとく或オトコを活ハサクとひ抱ハグとす、活ハサクをひく
あひへたわきにかくとわかすに麻マ牛ウシの事

よのばなふれやどの大あくとかくまへやかへてせきも
のふくやうかねとくとくがくがくとくとくのむ
せとゆーへ散ハラフとつひてふとよだのむへちかとく
かわくとくとくとくとくとくとくとくとくの
名キムシとくとくとくとくとくとくとくとくの
詩シとくとくとくとくとくとくとくとくとくの
よふにひよひよひよひよひよひよひよひよひよ
よる代ハタケとみのとととととととととととと
あよはる金カネがあよはる金カネとあよはる金カネと
あよはる金カネとあよはる金カネとあよはる金カネと

此をふとひまし事をはせたての所あはれくも將危將
の名とふと一々もとに通じるもの解とちうて二人鑑たる立
てふりへじかの事とあらばとてはまとく異と
きらじらしくなるてあらへば、と年を年
よやまんじと人のをひりをくいふてあるよ
のさくらーとをせたりとされ

犯云此序ハ越ノ化免ヤ佳吉ニ通すニ仙ノ亭ナリレバ
下畠各ヨリ去ルハ此篇ハ知己ノニテヨリ起テ人間ノ貪福ニ
前ヘタル、後ニ花影ノ権チヨリ朱霞院ト富田院ニ結文
セリ或ハ鰐鱗ノ名ヲテ國タノ花ノ仕舞アエニ並ミ

ノニテ神アリト袖スレ更に金綱鳥アリ右ニ紫金扇
トエイ・テ牛雀角、下ニユリナラ置キ是ヲ錦絣ノ文法
ニレテ禁物ノ名ノ獨善モ紡レガラン矣ルテ結語モ人ノ要
ヲ占ムニハ當時ノ寺ヲ祝シタル帝中ノ偉長殿ハ文外ニ
知ルシ

千句跋

蓋木田守武

ハシ能詣してソクナリサハシヒトケルヒ
ヒミトモソクノ風流ナリてあはれ一句をトノル
くあはれやとせられ好玉のとトアリヒトノハシ
ヒミトモソクナリソクナリハシヒトケルヒ

三うむとひくわあへーらかくじを所人の耳
へアきに仰せましーとくらう事あんうとお骨
の骨うどふーりけむとくー合へーよーとや
あうとあゆとじと難いひーやとーに仰せ、ねづれ
あトあとあーと好むかの言わされと河うき
サの舟とれあーはんやかーと達くよをかつん
たすあし、らと事裁のうとくのい化念
とー長行とくかくとくと傳へ、座るううとある
まよとじこ入よーつとまくと事船へぬかうの
舟譜入への往と腰と仰あほりまく

まくとそくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

和云九路ハ伊勢ノ久々島傳一テ言ニ曰^ミ事ノ詔リヒ
タヌラシノ今ハ始終ノ文が澤ラ前テ中向ニ御詔ノ親^ミ紀
孫ラ公セリ^ミ事教以下ノ奇言怪語ハ總テ其六代御詔
ノ詞ト知ルシ^ミラ御詔ノ盤ワナラテモ安^ミラソナ^ミ一
タニシクタニモ河本シラアランヤラニトハ御詔^ミラセノ定ニレテ
何ニ又シナラサントハ儒仙ノ通ラモ取倒セル神^ミ承人
ノ活詔^ミラシ但し作者ハ吉川田ノ長^ミ官ニテ吉^ミハ比ニ
守武翌王一トセノ能譜ノ先祖又ラン

鳴鶴集序

蓮二局

一巻の間加老人の老とむくはります。この
序は常朝のうつとしげ跡の事あると
つづきをあらわすのむかづるあり。一月のあはま
のやまとよしのうきのゆれをめり。梅竹す。山
石くとむのつぐもあてお丹にまのまほ。さがる
今年の元へまにまつて。またとよみのあわせ
こじひのうれいりらく附もたれるとらひあひ
ちそくのよきにまつじつをよしまれ。

秋をかねのんはりやうに。二月のやかくせきくまね
よつり遅きたくニホのあらわきえまくあらまに
ねの帰てあるうち壁よき利。もとあまてにまし
廉もわまもれのうち。行せのまぬのかれぞ。し
新の老とよまれやよびのまくわ何ものぞ。やに
がいきのふもあとまくわるとかまのふく。もと
もとおれ利のまくあらすの在らまくわのの
ひのくよさくあく。もとあてにまくわと
のまのあくとよむ。もとあてにまくわと
もとあてにまくわとよむ。もとあてにまくわと

ありても、弊と云ふ事は、かねてがむのまゝとす
て、何とあらて、海と年々の元をもつて

犯云北跋ノ専用ハ四季名用ヲ配ルニ妙アリ誠ニキモノ
文法ハ北跋ニモ數多ナカラ何レモ一体ノ差別アリテ其ノ等ヲ
文鑑ノ文鑑トタルヒシまハヤ四序ニ年ニニテラ四言ニ
春六七年ノ先ト云イ其ニハ音シノ先ト云イテ秋ニ先ラ
ニシテニスナル裏毛ノ觀ハ北所ニシテ前ノ書、顔ニモ矣ニ
冬ニ火燒火ノ更ナルニホシノ句ノ妙絕毛壁掃ノ對ノ親切ニモヤ
春待ノニモラ以テ年々ノ先ト云イモル七絃ハ檍ノ自在
ヲ絃ニシ但此毛へ農、ニ輪山ニ住ス先師ト所縁ノ葉ツ

向類

花鳥對

東苑訪

度却れ仰せよ天也、あり陰陽あり男也、女也、天也、
義のありよに「る」父母也、恩のあり下りて、ま帰き情の
娘也、下りて、暮もじこらももと、娘もさうれ娘
おうよのいひあんまうと、家のみどももひもくらうども
娘て、娘もやもとひそりつて、ひん花もひくも、ねうて
そくあふうももたぬみとみよりくもくとねうて
そくあふうももたぬみとみよりくもくとねうて
荒鳥もねうて、もととあるのあら、うそやられ、よまよ

三りの秋のじよひうらんをみまほへうすくあ
乃ちくせきあれくあゆてつゝこまくまくとみを
まのじよけ鶴のまてお家のかくはくすあれ故人
のふとよみて聞こえひよひくもくとまくと諱
連歌と花鳥の二とよあわせよよかたのう
とらへたる破のあく見むたとときへ筆の本と
じきの情と字て新車の筆窓とけくわ
筆と詩歌からわく陰陽の兩儀より五倫とす
ほしてそれうるまのがくわくはくはくとやうげ

えよきのじよひあそひま帰と返のじよひをちよ
されよまのじよひのこめハ吹かくのじよひとやられを
君主の雌鳩の詩歌の用事とあざれぐのじよひと
れかやめの鶴鷗ハ重の信がよしとられて詠きむ
よあさうすくかくとよひ詩みじかくふくとえよひの
きよひとくかくとくかくとくかくとくかくと
「妹」といふ姓とくにや明をたぶ一樹の集とす
かのじよひとくにやのなよすあくはくともと
四半の物とあつてのまのむちよがくはくとくにや
きくせきのまをみかの月とらむくわの風と

ゆかず重よきて死のうとも思ひつけり
あはれのまゝ木のももてたゞとせんしやまざめ
あともなまくやなまくやのひの写體ホトキスを仰る人の心
そよぎわく喜む寂寞とまじりあひゆゑの聲
の里もくらんよあはれば國よしものにて君主の心を
えよやうに仰よ舟をこの國のふるくらん國の人を
詩よくうて三月の色とりどりをや和朝の人を鐘よ
がさりてのまのひとからくわせや加陵のことをばけ
て作せる色絵すとや蓮よ艶かなれの涙の情
へやうい桐よ風風を唐震の匂よめぞうられど鳥

○新古のゆめりうて傷よ繫ツヅキ馬を又兵衛の浮世海よいぢ
麻よねまよ古に眼の花紋色よかやくもと唐保
の獣物師を竹よ虎とぞひとれまのの巻深むき
こほもあやすらへとよれうらへとくにそく物よ母西の
諭あくつ葉の筆よ筆よ連三の附合つあわくわ信よ
野よ御詔の筆シハあくとよ布よ紙よ豆よぬり墨よ
筆のあくつひあくとよ行よ書のあくひ紙あくとよ
こみ行よ書の筆あくとよ行よ書のあくひ紙あくとよ
もくわれておとす御よじよあくとよ紙あくとよ

むらうみのふとくじゆのあてまきけられの筆す
ちよて柳のなれの止道八まくたまく行へ風の歸むる
もとあともほ城のふよよかてあらへらうのまと行
ひや上路の山城りゆくらしく和うの浦へいふ
やうきてひまにひよよかてあらやくらうのじよ
白云此頃ハ宋玉カ對向ヨリ俳ニ理平廣業ナト
鳥獸松竹ノ對ニ效ヒテ先向イ先對フキ物ナラヤ但レ對向
风雅ノ的面ニシテ先向イ先對フキ物ナラヤ但レ對向
文法ハ理論ヲ後ニレ文章ヲ先ニセレ委曲ハ首尾邑ノ題註ニ
在ケアモ設論ノ虚實ヲ知ルヘレ

夫六向名ハ天地陰陽ヨリ君臣父子ノ五倫ラムイ其ニヨリ詩書
連繩ニ花鳥之姿情ラ論レタルカ或ハ花七盛トハ前二物詔
ノ詞ラ借ワテ花一ノ宵ハ古五ノ意ラ取レリ或ハ秋花鳥
ニ冬ノ花鳥トムキニノ啼ト咲ト咲トニ最田各レテ互見ノ法ノ自在
見ルニシ或ハ爾ニノ啼トハ佳音ノ五ノ詞ナカラセノ耳ナレヌ
花鳥トムイナレ殊ニ秋咲ラ錯綜レテ言ニ句讀ノ用ラモ
知ルニシ或ハ詩人ニ早咲トハ江南一枝ノ梅ラ借テ一鳥不鳴雪
儀ムトニル古詩ノ詞ラ取合せタルハ花竹鳥トラ拾ニ寄可セテ
是ヲ一時ノ傷トミレ但レサニシ花鳥トハ所鶴ラ冬季ナセル
蕉ニ新キノ一條ナリ或ハ亭ノニ毒覺トハ蘿宮四歌ニ寄

セテ千鳥ニハ花ノナキ古ヌラム一リ或ハ観海筆林トハ對有ノ胞ノ
博達ニ喻ニテ向者ノ心ノヤ知ラ論セヨトナ

去レハ對有ハ居ヌニ子ヨリ昆才明方リ且偏ニテニ強テ姿ノ
花鳥ラ論セス先ハ情ノ花鳥ラ表ス左ヨリ詩モ連体ニハ
姿情ノ先後ラ知レトナリ亦ハ雎鳩鳩頸ハ和漢ニ詩ニハ證
文ナルニハ雲唐折ラ詩施周南ニ對ニテ鶴鵠ノ故夏ナハ別々
去レトハ雲ノ後ニ奇ハ夫婦同居ノ深草ナハ鶴鵠ノ古ニ取合
セタル文五章ノ自在ラ稱スク文五章ノ博達ニ證舊ニシ或ハ
詩花ニ奇鳥トハ漢文ニ詩玉露花淵地ト云イ傳奇ニハ
初陽無朝東ト啼テ和漢ノ花鳥ニ和漢ノ詩詩ニ奇鳥

詩往トハ雲トノ結文ナルラ兒ルヘシ事ハ兄弟ノ花鳥ハ屢詣
仰詣ノ業格ラ甲イ或ハ朋左ノ花鳥ハ屢々地ニニ方言ノ詔
脈ヲ感スモモ一樹ノ傳ヨリ例ニ虛毎ノ兩用ラ知ル一レ
或ハ梅ニ鷲カトハ手ラヨハ對有ノ詞ナレハ比子ヲ獨リテハ讀
一カラス或ハ立方野毛羽坂毛總テ古音ノ詞ナドラ芳野ヘ
花ノニモラスイ達坂ハ鳥ノニ子ラムル是ラ隠見ノ法ト云
次ニ春ニ立ニモハ忠峯ヤ寺ヨリ杜詩ノ春寒ニ冰雪ニラ
倉メテ雪花ニニモノ時ニ即ラムル例ニ和漢ノ博聞ナリマ
春モ寂食トハ重々食ノ詩ノ四面體ヨリ和漢ノ即全遠
ラムイテ毫毛毫毛ノ如花ノ云イカケナカラコ思テハ蜀帝ノ怨

モルラエ一リ或ハ禰子ニ社丹ノ續キハ社丹モ春夏ノ遅日
アハ和漫ノ論ノ序ラ脩ツテ天望ノ花鳥ラモエイセツ
但シ詩トエイ鎧トエイテ一年一月バ意ラ對セル社丹ノ
上ノ名詔ニシテ況ヤ花毎更ノ筆法ラヤ勢ニヨラ蓮ニシテ
トムイ伽陵ノ花金蓮ニツケテ狀表御手踏疏ノ詩ラ含口
總テハ花鳥ノ緣詔ヨリ總テハ其名ラ文草ニ配ル總テ入
詔路ノ新續タルニモ一言ノ粉骨ラ称スレ或ハ櫛ニ敷手馬
ト席ニ紅臺ホノ一對ハ先ハ倒将衣ノ格ナカツ全ク五意對
ノ奇絶ニシテ墨帛縹毛舟ニロ牽ラ譽言メテ傳文ニ此坐
法格アリト信スヘレ然レハ浮世又其衛ハ大津緋ノえ祖ニ
御野古は眼ハ彩色繪ノ先達トエイトセリ或ハ唐揚ニシテ
ハキニ和漫ノ勵昂ホラ對シテ中向ニ心ノ花鳥ラ結語タル等
ニ文章ノ才ラ知レシ或ハ物ニ身西トハ強テ一絲ノ論ヲ設テ
内ニハ達奇ノ吊事弱ラムイ外ニハ帆詔ノ活計ラムニ柿一鷄
豆ニ鳩モ仰ニ帆詔ノ葉ト括ナヤラ一絲ノ模様ノ短詔ヲクル
或ハ雲ニ鶴トハ食ラ水ル類イヨリ花ニ鳥ノ用アフニヨリ竹
ニ雀ノ無角ナラシハトタニ世はカラソタル誠ニミニモ虚妄
ナカラニハ或ハ竹ニ雪ノ花ヨリ松ニ叶舊作エイ十ヨル何ニモ詩考
ノ詞ラ借テ冬ノ花鳥ノ向情ラ附タル此等ハ画ニ所屬ト云
或ハ角ニ屏花トハコ番行宿ニ春ラ待ウトエル結前生後ノ

花鳥士ハ幸ヨリ正月ノ祝詞ラ係テ氣ヲ知カ君ト云ヨリ花
一字ハ折節ノ風流ナニモトヘ對向ノ結語ハ古人も多く祝詔ヲ
用イテ當代ノアシラムリケレハ莫ニ施せ浦人も總テ、君ア
東ニナツイテソノ花鳥ニ和キタル花實ベ而在ノ結文ト云レ但レ
花鳥ハ假名ト真名トニ合乎一ノ極メ庵ノ遺稿ニ留マレガ、今ハ
真名字ヲ加ルニ及ハス讀者ハモノ通用ラ請シスレ

影法師對

櫻木固

毛の毛ち錆のやヌヌク

誰何や忽然トキミリテクニヤ四更聲ヒヒヒテ

とがふト津匠人あわく翁うら櫻下トまわり翁ト對一丁
庵主や波マ毛聲ヒトはりてえりと行エテ津何人あれ
翁うら櫻下トまわく翁ト翁ト庵主トやるや庭あるの
にのせ度ヌヤテコ一丁トあつゝ音もく翁うら櫻下ト
えりて翁を翁うら翁下ト翁うらや波マ庭ふのひれ
七ひすすまえあたあく音もく翁うら翁下のきくう
何う翁うら翁下ト翁うらや一翁いわく翁うら翁下
翁うら翁うら翁下ト翁うらや一翁いわく翁うら翁下
の翁うら翁うら翁下ト翁うらや一翁いわく翁うら翁下
左巴あら海うら翁うら右巴あらとくわく翁うら翁下

さうすまくと考へて四一論の勝れりうて是と智
トヨシモヤハのふ詒とアリニテ居て嘗めを意識
あくセキシヤクセリヤ院士の境處ノ西向の御令をわ
金ノ内トサムラの度莫アリハの度莫アリト
えリヤ一の経そのので分別

狂云此筆ハ白櫻下ニ詩毫ノ模様ニシテ始ニ年尾ノ角立シ
続ニ元日ノ向厄ヨリ作有ヘ是ヲ四文格ト題セル誠ニ傳文
ノ一格ナルヲ今ハ選匠ニテ對向類ニシテ去レハ包裝ノノ對論
並在窮ノ言詔ラ争ヒテ巴ノ危石ニ次新見ル鏡ノ影ノ差別ハ
分明ナリ去ルヘ漫文ノ設論ニ毛勝レテ一篇僅ニ十七八首ノ段
隠士ナリ向櫻下ノニナハシム下ノ稱ロナリトソ

本角人證第十七

辯類

居眠辯 桃化辯 伯兔辯 自得辯 梅長者辯
巴子辯 瞽祐辯 招應辯

詭類

龜上人詭 名才詭 主詭 樞萬人詭 名詭
名二子詭 論師詭 魔詭 詭 江詭 三毛詭

頑類

高秀才頑 不懲不頑

暗德頑

拾音頑

本明元鑑

解題

居眠辨

趙北枝

せうつぶなまきむの北枝へりすがる。よぎらうに印に
たむかうて眠るもあひて匂ふ事一て是れはあらう
ぬとこても眠りゆけりて寝て事あくつて仰て寝れ
候。と眠りゆけりてうらうをば休まねづる歎の邊
ねくらむしらひく用あれ。眠りも用あひし牡丹と宿
の本ひづけと蝶々用ひててもあらじてひりて
す情のまよまよよのうるくねづくやうに春の
おひりてあてやすくちのむらうとおひ

りとぬうてはきあうそれり眠れりやううとふく
ねくをあほすもくとくまとわとせむとすむとくをなす
あらきりそ在周。蝶と有てのかまあそひて山翁う鷗、
宋辰のゆくとくあらうらかと眠りて、君王と摩
らうとひ宿とあいづらまとうれりとねひく用あれ
へらひくも用あうともう一ー林と林はのうあ
も。殿管へりねくは殿さくねくひりと木根
あうとよくよみをもく壁とすれりて、辭ともかくあ
へじると山の兎と馬のそとをほへ事りすれ
ちうと屋のよ陸う帝の隣と床さうおりすれ

ておへて信あんと金体のくよもぎれて竹と芦の
辨ひよりて唐へしひづかへふとやし

紀云此辨ハ婉麗ニシテ然モ乃折明白ナリ去六經俗ノ對ニ
俳諧ノ詞ヲ尽シ蝶鷗ノ對ニ儒老ノ賜ヲ搜セル一品等ノ
趣意ハ士局ニ知レシ況ヤ尾ト云イ雪隱ト云イ帝社
子陵ト云ヘ等ハ文章ノ競舞ニシテ唐ニモ此辨ヲ傳シ
例ニ虚實見ノ文體ト云ハシ誠武人ハ能諧ニ持テ玄ハ和云
毛云アラト御スレ但シ聖皇ハ前後ニメ趙子ハ彼カ標号

桃化辨

蓮二房

うへりわふふつゝうすだのふのあうふあうてがの
ふうたの音とあうとあうてがうホトウイナ書の
あうとス難とわうとがのよてふとととととととととと
きれさうのつしわうしむとー升波よやううてせうの
清うとらむらうにふまくのくめりとまるととまると
せねとわうとけふあうとととととととととととと
西とせうれとととととととととととととととと
よじらうとととととととととととととととととと
化のとととととととととととととととととととと
國ととととととととととととととととととととと

紀云世辭ハ其日ノ御皇情ヲ演ヘテむモ辭ノ体ヲ又セリ古ハ
北公ハ越ノ瑞泉寺ニ住ニテ故院浪化公人風流ヲ續キ芭蕉
内ノ凡雅ヲ彙イ給ハラミニ桃青ノ松子ヲ摘テ浪化ノ
化字ヲ揃レントソ然レハ玉世ア桃ノ實ニ蓮ニテ剝ノ花
ヲ對セル詠三篇ノ奇句絕ニシテ不思ふニまハ肯第ト
見ニシ但シ井波ハ其ヲ御ノ名ナ

伯兎辨

東花序

越カ天下ト云ふ所ノ名の如クアリカクア花序
トトスハ此國の咲裏ニ通スカドヒノアタマ

使とわすれしやま人の妻實ハラカヒカ
今の心事のへたとされ、又は作中のふとくにて
ちとよのくあつて、一叶をも、假名の辭と
唇の辭互替々供養とぞけてせの名をもあらへ
ひつもじとく一例證の名とくへとぞく
今もかくよしらうあるいは折の同孫もあらへ
あらもくねり松迦丸の最後の説も、複路院羅
ヒタヘヒヒー、そのやく席兔のらうもくとくを
之のらうもくとくをのよきとくを

ふらんきりらうに作のよへ通称うへて今「先のよせ辨
あすに辨とのよす」ともいひてくらうと云ふを
さや辨は内派の上達り智鏡の局と名あつて日々に
辨ふとされりへと云ふのうらへて古也

記云此辨は捷蹊ニシテ人ヲ誘エリニテアトヨシまじハ席毛人角縁
ハ遺教經、趣向ニメ其人ヲ人ニ喻ニタル最後ニまじ母辨
ナラン況ヤ免まラ辨明ニテ彼々上下互に書ヒタル例佛誥
筆格ヨリ墨寶へ一毫ノ誤毫ナリ但天下村ハ福居ラ雪

自得轉

北七星

西田のり生と云ふは脈と毒あらぐ寧りと
有ふべくほほ月と骨ふあむ買人やかんやらむ
河豚と毒あくハ龍宮の割れものされて西田の
とくとやくへ乃りとて酒呑と骨あらぬと等と云ふ
かふてとくとく やくニハ骨のものが減るて得失當分
ことつかりやらくとて堅存あれハ牙ふくれあれ
窠ひく一月のあられやとといひどふの内とくも
せらきくと向ふあらふととて義西がうまれて義西とまく
不治の布子と云うとて義西がうまれて義西とまく
ゑれこと珍しくあらぬあらう一にやくとくとく

「うあ、ようやくらかうといひひと隠逸の人の渡洋か？」
せよありんともちかへとまよせきつて、書わのとく食え
軍報の園（レ）よりうきて得もあらひますよめによがり
駄けとほ月とぞくむるのえと敵ととて一盃一醉
の股（ハシ）減（マサニ）て本だのまろのらかうし財の月と村をもひぐ
くもよ月をもひくもかひどりも秋の夕これもえすひのま
もひりくもひくもかひどりも秋の夕これもえすひのま
くそくひくもひくもかひどりも秋の夕これもえすひのま
自得のゆきくらこめく失せ自得のゆきくらこめく
紅云世辭ハ在すナ意地ナカラ全う仰諱ノ筆法「り」とハ西風

前引自得無事ヲ脅威也爲御中ニ十二箇ノ面々シ用イテ
春秋ノ面ニ二箇ノ面也ヲ畠合ス文ニ互照ア法アリト云ハシ然ニ
四季ノ詞ヲ重テ而ニハ四季ノ姿ヲ云イ後ニ四季ノ情ヲ云ル
以等ハ文ニ付ヒシニ増シテ龍宮ノ制札ハ諱諱ノ人ノ常話
ナカラ此篇ノ向、奇縁ト称スシ但シ作者ハ越ノ新潟ニ住ス
北村キノ内人ニシテ先師モ並御名稱セリ

梅巨者辨

井立一平

近卓ノ私也をひきとて、官隣ノ私と括て私と呼ぶ
私のひととあつて、わがとす爾の（よよやき）く私のみ

と一升もあ
無ふをあま人の手よりて重よみの柄
と極てかくせの根の根かよのまわらとやらてや
ぬとして井の水、ふたりふるや根と男すて根筋と
あんう根を根と云ひてどちらくあんうしてらふ、根の
根筋あらう十けで根ふきの井ありて其一を
おえの井とすて其一を用ひて車井あらうと
様ううの瓶とわらうつをそとあまふ井肩あれ、水井
スカとそとへまよらつまひあらひもまより、水のあ
るは蓮とそとへて蓮よもじと下化りゆきて茎のむ
ひすくに種子こねててスヌヌの細く根すらゆく

か
の有すう見るよもくよれど、よりいわふの五葉のす
縞の花やうらとあらも生て立ちよしむけのかげ
うに席すあよふ根もひて根ふのねはむかうう
がよしれりとし市中よ陶とももすとよやなとへ
の名よきとしこかくとし作のやくとよもして根筋や
あしもふとやかくじげらぶの根の咲付ふ。——

仁云此辨ハ虚誑ナシ候テ家居ヲ辨スルニ歸ラサル所アリ
謂シテ其年ノ分別ナラハ陰長ノ間ニ四ツ籠テ其家ガ
神慮ニ往セントハ誠ニ虚實ノ自在ナルカ去ルハ和諧ヤ
ヨリ漢二八年叔カ安蓮ラニイ体ニハ有宗カ敏樹ヲ立

偷園ノニテハ首尾ノ文法ニシテ文章ヲ哉ツニ刀ヲ用スト
云ニシ但作有濃ノ枝草ニ産ス姓并上ニメ長貞ハ
櫻萼也

巴弓蠶杖辨

東草辨

竹林を延ねの三田あつて、日本氏の人れ竹はよ。而て
竹よろぬのらうと竹アリ。而やくけ竹と曰ふに
あつて、越の名竹と云ふとひらきとけ國にしき
ありて、凡雅のいすほづねやせても竹をもとと
て水モ一ト里のくよよもひ月、弓をむの竹引。一
も竹もあらんやあらばよ無竹ト詠きとす。のち
も竹もあらんやあらばよ無竹ト詠きとす。

言の福支川のちくよじかのあ風のわふくの龍
と化アリ。と云ふ事アリ。而やく竹林のもとと云
うと、竹の時よよはくとも後の竹と經、そがち、
はま寒の毛とやアヘて、毛はよよことやうの竹
をも行く。よかと行かう。かくし伊と摩アムと
このよよも。はくへあねとてとよくとよくと
せたよ。えうりて毛と毛のなどよへ。よよの竹
のあよへ。あよへ。よよらく。竹の竹くへ。とと毛の
へよよとよくもき。

狂言文辨ハ比体ニア狂甫カ拵候ノ意ヲ含ムモ文章ノ

官に廻リ然へ林ノ一木ヨリ木君ハ王子歎カ豪情ヲ云イ
化龍ハ佛具長丈房カ仙術ラムル紫寒ノ色トハ紫糸行
寒を行ナリ去ニハ巴ウハ先師ノ古門人ニシテ北越ニ風雅ノ
名ヲ知ラル今モ其の松ヲ貸シテ其家承ノ記録ニ續セリ
トソ彼カ山琴集ニモ見ヘタリ

招鬼辨

相左角

人よ鬼ニありま一と照々雲々と一て鏡の前ヨ
ミシテシテ善とモテドリ悪とモテモシテ
良ニシク利の向スヤアツリ其ニシキは之の事也。

あよひてせことゑにとぞくしてされくのあよひて
う色とすに二口の放ほり放トサセシトがまひれ、
志をやむら何めらふもあく圓と奪れあとまひ
手をりゆるくあくとわく例の二口の事とぞくして
名利の取ス人とあきらひ凶きのあく事とぞくして
此ニ事内性とあく勘當性と入けは一竹の事
河とそそぎ三木の鬼とやねふて父母とまの子とお孫
辨舌とほくて其鬼のあくとらむるよ纏けのゆ
一木ひるうて今ハ内屋と假よまきて首陽のこゝり

總てくつらあうの是るゝ事もあらへずのれ
居とももくわれてらしく乾坤のふくみをかし雲霞陽氣
日月にてまきつて大君の務も自やかくあふる所
あゆのむすめあくへる處もつてしまねく一トうきりと
武陵の春よとーとすりよりまの在中園へふの
せ田々ありて入らずまじはうてあくよしひづと
あゆに費長三房々す上風のあゆひどくも剣玉石う解
のゑくらんと風物とくにほどのれ風味あり

紅云而辨ハ室主カ題ヲ借テ其詞へ虛誕ルニ似タレト儒門
言詔文ネマリ人異ノ今別理處ヲ離レテ自己ラ承ルニ實久

ナリ誠ニ性ノ昭々先物ノ善西ニヤヌヨラスニ臣ノナス所ニ隨ヒ
盡子モ詠残セル所ニテ即詔ノ多承ノ筆力ナリ殊ニ元篇ノ君臣
ハ互子カ音物ノ詞ヨリ出テ而體ノ中ノ君臣ナラン故ニ賴川百陽
トノ起句ニ賈君ノ隠レ所ヲ云イ百陽太君ハ結詔三題ノ招
、字ラニヘル遠ク文章ノ互照ヲ如テ博達自在ノ文はト
但し右中園ハ枕角ヤ別墅ナリ

説類

鮑上人説

東山長味

鮑の跡わざりのあくまくへこくへいりあ
ひづくへかくとあかとあくへまくと穴やすく

されより就てあらざりとまわらひ成りよ
ふとけりよくまのむすびのめぐらしる
せう人の脇折とこそまくいもく

スルトケリモハれ上人を
仰のまわすよしんと年

仁宗御文集ニ在リテラミニ主、題ヲ加フ誠ニモ其
名号テ大名ノ隠者ノ先賢ト仰ケリヒモ詩ニモ達人
ニシテ世間ノ虚實ニモ悉ヘリトワ

名小治主 説

應浪化

汗に満足、汗うけのやうとて、船と研てや切
川の波とじく、一らかとあがてゆくとあき
わくじく、自転とひまつるをもへり、かくはと
けよと粗ひう猿と養ひて、みかどとまとほり
がやのとほり、一筆とそれとものと拂くとも
うと竹田の取るしよ土計つかうとあくとせ
らや海の慢こゝで鳥と漁ともれずれ
の鈴と駆とよの静かと用とす君よ西
もまかのとととととあああああああああ
と語されて自慢の慢の鳥やまうと體の

體のえやくあてて。但も備足の二子とひではうかの
一福と称とせんとぞと備足あり。

右云々説ハ備足ニテナラシテ小居主ノ名トナセル去ルハ備足ヤト
峰カケテニ蘇庵カ説ノ所、予ヨリ一篇ニテナシ用ルニ
文章ノ意地ハ各別ニテ等ラ胸骨ノ法トスハ誠ニ貽爪ハ嘴
但云々猿ハ朝ノ暮ラニイ居キロ硯ハ利鉢ラムル竹田ハ併譲
筆格ナリ但云々越瑞泉ニ住シテ應山人ハ標号ナリトフ

櫻痴人説

禾守中

年をえ福の年已るん東西お詫の運局ノ新編の年

ゆわうと悔ミテヒトモテ此方ニセお詫ヒテヨリ
北華坊の名とかして安宅の閑と趣んとくう傳
勸進帳の詞とてくよ其詠ト

此字中マフウのことを當國山ねの風雅ヘトテ
蕉門の高アモアモのことをすすキ西お詫の御
ムモウナドモはのめいとあひゆうナケルに
程山店の事と申て萬萬人の上取らううと
イレモ汗とまづれにす中としそうとこれ
かじ語テテヌキの事の事とまづの後行者
の高木屋モカウテ園の人々やうじ

乞願中まづけの候ら候」、并料く

主付し聞すも仰は「上の腰をあと一四丁上様當に
一毛根の五毛井上腰歸ふより一様の毛腰よがの
旅立「うなみと人せ峰山へうちとを今れ様高人
そと高々寄まつて候人あくや様とあまくあふ高人
侍宿の候よとかくうけあととよく鳴れし様と作む
歸められど此の山伏もえぞ商人も作のてよく着付
モ一ノノ既往の謡とかきれて肉のくくへ頸と
狂云世說へ説的面三事虚説ニラ論被ストミシ去レハ
五毛井ノ繪巻別十八先師北國ノ首金三許六亭ノ種

野店山橋ノ旅宿ア繪カキ一輪ノ卷物トナセル
其レヤ題ニナリ名ルラ題ノ名ニ寄セテ行名ニ書
ニハ佩格ヲ號ハシテノニモニ説体ヲ尽セん誠ニ文立堂
模鋒ヲ得テ北陸ニ作有アリト称スヘシ但し其姓未年
ニシテ北之毛坊ハ其の聲無ノ殿名トフ

名説

度却記

貢もひる武士ノ九クムアノツムミル尾名二十石めり
てじつてあくよば東革坊とい西革坊とい西革坊と
ソマ革、又そえや革也と仰詣のま前とあら

アラニの事よりかへ附るのをとらずすぐのじよ
めうらうつ来た一カスモ饅丁とも露しだての
跡と叫ぶたりしためにまたと云ふて「華表人」^{#トトロ}ト
あふる事けは是仰席御船をひもよてしれ月
くわゆて野々庵の町へ野船みいづかふゆ
町御子庵とよまこときよの一丈九メートル
三間の役石とあともううもながため町の用
ふうてこゑと寛ぎとくらむしむとく
其の具物もよきよれすよしと而も、駕廻
ミケハカルとまわる船をばくわくして

遍照院にまつて極みし所をさかねて雪吉
のをもよぶされにけのむと西おのども物一概
ひかくちうに御所の十石を十石をのれ
あしよ十九應がいひまくひと化わのひらうかくし
江戸の説ハ頃挫ニシテ彼ニ記多藝也名ヨリサニ名トハ
エイカチナラノ然ニ能譜ノ字訓トハ指シテ華ト花ト
字論ニモアラテ和音ト能譜トノ剛柔アタマノ聲トハ
時鳥ノ事モ古ニ豆ノ花ノ聲セテ例ニ我家之文
法事ヲ例ニ我家ノ意比ナランをモ能名ノ數多大中ニ
華表人ハ丁合ヤ再生ヲ含ニ種レハ彼ガ跡ヲ隠セル乙ハ

岩ニ掛ケテ露ル其角ノ形六奇ナリ其余ノ故アルモ故キモ總ニ
以直財ノ應用ナランまハ儒仙ニ走ヨリ和漢ニ詩五ノ人今
エーテ万物万像ヲ向ニ置ケル文ノ簡約ヲ称ヘシ但レ定義
八色墨ク顔ニ極ノ跡アヘタハ五人ニ續ケタル一說ニメ雪二台、
能及至ノ產物ナリ然レハ三篇ノ結詔トメ化物ノ術ニ近レト、
此等ヲ詠ノ文鑑ト見テ虚實ハ、^{ヨリ}這裡ニ會取スニレ

名ニよ説

本草鳥助

ひしニ蘇老泉うめりかよと転といひ載ヒシナガ
一ヒヒミホシナガヒミ毫面也と云ふ

ひしニ蘇老泉うめりかよと転といひ載ヒシナガ
レア足ニ為虎ヒテアヒナヒ風ふの狂氣ヒテアヒナヒ
百獸ハされヒテアヒナヒモ付ハサメアヒナヒ
セウヤヒテアヒナヒヨリ生れく氣氣ヒ虎の威ヒテアヒ
セウ信の説ヒテアヒナヒ志アヒ虎の威ヒテアヒ
ナヒナヒ虎ヒテ田やウ阿ヒ虎ヒテアヒ田ヒテアヒ
氣ヒテアヒナヒ氣氣ヒテアヒのよヒ威氣ヒテアヒシヤロヒ
高氣ヒテアヒナヒ會氣ヒテアヒのよヒ威氣ヒテアヒシヤロヒ
ナヒナヒ氣氣ヒテアヒのよヒ威氣ヒテアヒシヤロヒ
ナヒナヒ氣氣ヒテアヒのよヒ威氣ヒテアヒシヤロヒ

へやくよと歲のこゑふとねのこちちよきくさんあらう
のを、まつてからんくにせんじらるとこうのくゆせ
すとこうすとくよとくゆせとくゆせとくゆせ
すとこうすとくよとくゆせとくゆせとくゆせ

ひふせ説ハ蘇文ト邀三原ト傳テ別ニ能説ノ筆格ヲセリ其ル
先人成ノ假ル吉支ハ史記ニ狐ノ古ヌナリラ東ニカ朝カ客難ノ
詞ヲ含セテ虎亂ノ二字ニ用イナセルモ双角ノ法ニ古ヌ
ヲ用スルノ文錦ナランゼヤ馬子ノ倭支也ナシヤ或ハ遺金ノ
ニキラ云ル哉子ニカ兩ノ金ラ賈サシヨリモ一毛ノ書ラ故ニ

晋書卷五十一 通訓訓リ 奉レハ一巻ノ結語ニ子ヲ見ル眼
唐説ラウテ題ノ意ラスヘリワトムシ但し作有ハ木村年ニテ
接ノ伊丹ニ注ス當時ニ清範有ノ凡人ナ

論師説

西華坊

今之能説ノ師即トアズハ韓愈ノ師也ト所みども
あくモ能説ノをいづりかうレ師と承むトニテ
さうしたての能説といあて能説のたとえをも含
てし能説のとよも遠くせ思ひのほ處だされ
て近く能説のとよもあよひより清範のとよも

にて師の才によづけ。一脉也され。韓愈う師説。而も先進の論めれど師師を才によろほ。にてその才と並く一りともあらう今の大説師。かくあらかこまよからひより才子としていふ。されどそつて師をあらうかしととゆ。よえ。こくしとくくせす。其聲有の才よども。豈但とあらへ矣。元へと見て。年うて。あわんくる。今の大説の眼もう。齋は。三鶴。鶴のゆき。とくの代説の眼もう。齋は。三鶴。鶴のゆき。とくの見宣。そこの大根の行の妙と。あらう。と。所の野の真似。もやうすの。おもうち。われ。あらへ。と。あらむ。

ナリ。是も。唐子に。既に。瘦氣。と。あ。うばは。は。吸や。大工。不役。の。才。す。む。文。よ。と。か。や。む。は。る。ヒト。韓愈。耶。の。一。よ。も。今。輪。され。け。の。二。よ。セ。四。五。も。能。行。の。り。ゆ。と。ま。う。れ。せ。行。を。へ。き。と。か。ゆ。じ。よ。せ。し。ゆ。の。野。田。牛。の。よ。よ。稻。邑。と。よ。石。け。り。せ。せ。説。の。い。と。け。て。能。行。の。約。を。求。じ。く。來。む。と。の。る。れ。と。も。し。

犯云。世を。歸へ。退。之。カ。師。説。ラ。論。ス。ル。ニ。全。篇。而。ニ。彼。カ。有。異。ラ。テ。用。ル。所。ノ。各。別。ナル。彼。ハ。巫。醫。ラ。列。チ。儒。法。キ。リ。鄙。シ。テ。此。ハ。巫。醫。ニ。嗜。ヘ。ヲ。能。説。ヨ。リ。尊。ト。ム。蓋。ニ。偉。文。ノ。体。ア。テ。蓋。

論はノ跋意ヲ來セリ誠ニ田里ヲ理屬ラ離ニテ能談道理
ニ遊フトハ進行ノ以心傳心モニテ史記、清和音モ此語有破
スレガラハ此說ニ依膜ヲ洗テ理屈ハ如何ニ道理ハ如何シ
物ニ道理ノ無ラシヤト讀者ハ寔ニ往復スヘシ全ク解説、圓
鍊ナリ但シ招邑ハ備人禽敷ニ座ニテ露堂子也橘男

夜詰說

雷呂利

石園秀吉云あり相の山ね詰ニ天トノカツル
ものらむかあすやト詠うれしと云ひて
えわをかくとよ／＼門じうきよ歸矣トシ

上林りとおんやまとわへあゝ／＼直ひけり／＼等
あらういよトあれに上林の毛而跡ヲアキム
仕合れくほくとあまくしてすくよよのらひ
ふくれんかむ氣をあくすむよ人トドリとおの
すきもかく用たしもかく体やとけ／＼木や水
とよとよ／＼そらぬく氣よめらひ／＼於のよと
ゝPけうちるふづるよ哭歌すあい足ともも思
ふともちひよとPとくを胸にまつて泣ひきよ
も感ふくわ

夜詰說ノ感入ノ音傳一レテ寔ニ說ノ一まヲ加フ末ハ

太閼一向ハ天下ニ武一人十人テハ人ノ恐ルキ者ナシト諦人
ニ云ハスキ釣詔ナルラ輕薄ノ僕臣トモノ案ニ落タルハ
つ情レ去レト雷呂利カ名詔ニテ一座心ラ轉換セシ禪山永
一向若ノ落法ト云レ誠ニ史記ノ清穆古傳ニ東方朔牧臯
ナト武帝ニ言タル夜詔ニシテ主ニ化詔ノ道ヲ論セ、國君
ヲ取ルニハ世間ノ理屈ニシテ國君ラ心安シトハ能詔ノ道理
總テハ化詔ノミナヌ文鑑一部ノ道理トテモ既等ノ凡雅ヲ
考フニレ

辻談義も詫

露五郎兵衛

され上二人も下へはすこ細くすてあうもすくし
そんとのふ誓氣トとのくや細あかくてあんちを
いきさすかよどや故ニ江陀やま木ト立森三さすと
行テとよすてほくよがのふすもあくナ一千里あくと
西方もじこすとの方へ伸あらて諸人のば歎とけくと
しててあくとづりる「ト」されより持國多門
河トソク一騎當千のて天王よ仰せられ比歎とよ
くふとあいと高をとさくつゝやまれて差戻一かよ
す御て感をよりひとあくときり

犯云世有ハ夷洛ニ名ラ知レ洛陽ノ仏寺參礼、彼寺丈居

ラ張サルを支ナレ西ニムフ辻嘶ノ元祖ナリト青レ祖翁ハセウノ名ヲ
称シテ露ノ子ニ新古ノ制アラント可矣トモトマリトヤ然ハ
雪月花ノ經詔ノ說ハ能詔ノ家風ヲ體ハシ傳臣ノ説ニ
ニモ一毫無ハ並ニ益ニ仰タレト祖翁ノ一説ニ釋解テ造レ社五
名ノナルニ特リテ古今ノ文脉ノ引ニヘリ矣シ録三
講語ニカク一脉ニミカル源流アレシ

墓碑記

二年章

シトヒ萬葉のじの解ヒテアリテトモテアリ

トシテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
實トアリテ印トアリテアリテアリテアリテアリテアリ
の陰也アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
先祖もアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
トシテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
トシテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
金アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
アリモ儒師一貫の口傳アリテアリテアリテアリテアリ
シトヒ上葉ヨリアリテアリテアリテアリテアリテアリ
テアリト称トアリテアリテアリテアリテアリテアリ
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ

のふとく争衡、此そのやうとのうとこよせの擅渠ふれ
をもとくうみてるもんやわくやふくま子か
の寓言ふれこれと今れ日新の全つてアヘとアヘは
喜むゆの譲下と一将とわざわざの雪かほりや
鐘の神すらくらくひ鶴と蛇とてほゆの事即
ち唐辛の入とお茶屋とニモコヨケレナヒ太郎
の下もとすくすきうらうとての想とせくもり
もさくに併せへしもがくの毫とめくもみを
ふろとあざとすゑの能文の國とさうどりし
伴路の國とまのうといふを圍くのあざあを

トウトウはのうよあづなへあづけしゆくまはう
まよ車とよわはほせのうきとくちあくねの威權
とくまうれてあれのうきとくまうれとくまう
とくまうきともえをねまとくまうれとくまう
ふとくまうれとくまうれとくまうれとくまう
ひあづねえまの四よく一体とまとめてあらのくま
うきとくまうれとくまうれとくまうれとくま
まよ車とよわはほせのうきとくまうれとくま
一凜の高祖の文武とあづねて御す陸機と頃
あひてトとくまゆのほとちあうや

往云此瓊公比体すまんが文即ノ西遁ラエイテ凡雅ノ創序ニ
セセルナラン先ルニ此作者ハ花鳥工筆第ト云ヘル集事ニ焉まノ
花ノ解ラ作りテ玄ニ紙頃アリテサノ一チテラ猿ルトエフヨリ
画つ三支遁ノ趣テ金ナヒリ或ハ西行ノ高貴ノモトハ僧
ノ和キノ詠ハサルラエイテ鴨三子ノ撰レタルサト或草ノ
木互辛ノ極名ナカラ草冠ノモトハ名言ニメ源氏ニ
梵網ハ和達ノ奇對ナラン事ハ陸機ナウ臣頃ニモ文武ノニ
モラエルヨリタニモ高貴ノ花鳥ラ称スセ等ラ耗物
比白トエイテ靈官ノ文銘ニ看ルキナ但シ作者ハ
武門ノ名ヲ隱ノ濃淡わく山陰ニ嘉道スニ竹ハ山陰ノ毫情

不懲亦頑

木林而凡

遙上によ唐土の鶯鷢杓鶯歌鳥音とよの聲とりり
まゆゆ歌とよのふかづて一七尾のあくべりりとれ
ニシモ細きととてふとふとくらむり聲の二丸圓と
うくらべ一ツの音を葉瓣にとあくねくし風情と
すみふせうらひ美きとやけとくほくのりと年はす
の頃とあくべり音の聲はくとくはくのりと年はす
れ凡庸とつてゆく格益のをあうてもうつづく

かへりあらむと詫ふとばかとよほに腰筋
ときあやかへせまわれるをもととがたせ下まと
ほしてお禮に聲づくとおのへのへ鶴のよひ
鐘鑼鼓角のせとゆき先づかべてからむとれ
さも一ぐとらへてまたひじと又ひかくまづ
さも一ぐとらへてまたひじと又ひかくまづ

十四、此處とあるとあるの日辰
此處と有ることありて居るの日辰、アーテマ
ニシニシとしめんせとおとを金鏡の門に
トムニキテラホト旅アホヘの准のよこいじ
万葉集かがりとみて一筆万葉のよこいじ
つゆくわとせせり金鏡やとよとよとよ
てタモチキモヒタツシテ一様手をあらわ
のうかうとよとよとよとよとよとよとよと
てにひのむわくとよとよとよとよとよとよ
とよとよとよとよとよとよとよとよとよ

「もうち詠のくへれりと戯りてアミモトヘヤシの聲を
のむしらへ全言園の角アホリカヘトモ有して
シヒテシモの酒とさあすとあるとはアシメ酒と丘
シテ高ヒのちうてとねむ起觀のシムドヒトヒ
屋マツリテとお言様アムシヒトメナドヒミ
シ益のこうとほやしと圓雅の向アミモトモシ
シモシムカヒトヨウルハムシ

役ニテ聲ハ不振ノ持誦シテ「金葉帝」兩色ノ半唐ア詠タル
誠ニ滑就吉ニ詔解トラン但ニ世名ヘ和焉ヨリ事ヲ物ニ徳
トニアガヌト先レト所詞ノ艶羨流シテ能詩ノ家ニ好

ニシナニ並ノ名ニ附ヒハ屈龍ニ水アマケルヤ如アモニニ其ノ駿ラ
経レテ文章ノ死活モ物名ノ好西モ世等モラヌ鑑ニズキ
ナウ總ア一毫ノ故古又古語ヘモ而ニ漸ク筆業スヘシ委曲ニ
解スルニ墨堂ラスニサス

附徳頌

高九朗

醋ヒシト「誰うじてくらせうりしゆとゆく者
てされど嘗ト人あひて」醋ヒシト「性の良て」
「アシモカ甚つうとの私醜ニタクヤカヒ
の同ヒシト「冬の生氣のあそびよふすらの舊口

とお前とおまえうしもととおれう温かひりはく
かへふうれておすの肥ひとけふのほとよらわ
ひ嫁のじくよおほのまともひりくやへじくの
のまくとまくとまくとまくとまくとまくと
ももして人を消すとてはとめよに深の聖^{スカイ}
色とあれと酔具の四^{スル}あとくせんも物の見せ
序のひいあくとくとくのわぬるくまく
雪の用とくと草先を草木のすゑとくとくの吉
ヌエキヤの音とくとくじらわく詠舞の音^{ウタ}
きくとくと歌葉の聲^{ウタ}くとくとくの聲^{ウタ}

さうううと過去のらきらきやふたとと申めくと在
からうとゆきよもくしよのあたまのすと併せ
ももくとくとくにはくはくはくはくはくはくはくはく
うりううとくうりううううの肩帶^{カツダレ}とくにまのくれ
津とくしんせく湯薑のふとあくと酔妻のひと
うそく代^ハ行^ハまれ

狂云^{カニ}扇^{シヤン}劉信^{リュウシン}酒德^{サケテク}対^{ヘテ}題^{ヘテ}酔^{スル}德^{テク}ト假名^{ハナメ}
名^ハ德^モ本^{ヨリ}和訓^{ハクテ}德^{セイ}音^{ヨミ}ラ訓^{ルテ}用^{ヒテ}ハナメ^ハ美
傳文^ハ傳^{シテ}ニ書^ク大德^モモ^セ意^{ナラシ}或^ハ中^東ハ^シ醉
名所^{ヨリ}梅津^ハ梅^ハ梅^ハ子ラエル^ハ孫^{コノ}長向^モ紅蝶^ノ

短句モ慮外ノ音トハ隱見ノ法ニテ總テ統治ノ筆格ホヤ
去ルサトモ見ツワカトハ辛夷ノ詞ヲ備ナカラ鶴鳥之助ラサト
見摸シタルをモ一編ノ首尾ニシテむモ一編ノ名言ト云ヘレ
但シ作者ハ越ノ糸魚川ニ住ス高野牛ノ佛土ナ

松吉耳頃

川宣三嘉

世ともも實くのゆるあらうてま未とぞの事と稱
所爲もさぬひとよもそけられとほもどり
ハ和屋ヨリ出でたのゆゑとあれとゆゑとあれの風雅
うんとく人のたぐいもあらず一まよは草とふ

わきよあわね本とあらひよくのまよ
よか秋うけたるよとくされ生坐のまよは
あとすへてゆふのまよしらひちとよのくわ屋
のまよはつゝれ中宮のまよ・もじりてく
いふるの経とやくとてや和風とくらむり年引
あうとほせの暖御とめにと仰らうの御事と音子
あれよととく内のものきよてそと御殿宮の脣をまし
まのをと雪の匂うれくえまほ人の脛ヒツフリ
人のみこられてわいづらうと車とうちの太いすらよ駕と
かくひくづれんと天の生質ある一いだり下鶴

のよつとふつとてまやーのけのもすうせよめくまくけ
かうれうさうあうとひ日のもーかこしゑね菖と
きうて画の哀云の鄉食應とももくきの飯よ
所をめうとそとねきてとつあうーあう
川閣のよゑをよみこりあうは画町のへん、庭
席うらへ今ち西鴻の遊えどもあうい東園のひ童
よかうりて切わのむ袖をときうひくをも
をもあうてくらむと風瓶のうめあうー

行云頃ハ闘体トカラ始ハ羨人ノ毫原ニ寄セテ清渭
ノニ子ニ轉極ニヨリ終ハ西人ノ行藏ニ喻フ冗ヤ

草木ノ花實ヨリ花實ニ凡雅ノ一樣ヲ起レテ、一樣ノ花
實ニ次第情ヲ結レタル等ノ首尾ノ文法ニシテ常山
ノ蛇ノ動アリト云ヘシ去ヒハ和眞ノ草紙トハ漢ニ本州ノ角
譜ヲ云イ傳ニ徒然ノ經ノ段ヲ云ヘル小之秋カ露モ秋月
モ御櫻ノニ詞トモニ總テハ古ニ伊ナニ或ハ其事否ニ甚
ハ向對中ノ絶妙ニシテ論詔ノ萬葉ハ好辭ト云レモ文章
ハ直合ナリト見テ清渭ノ詞ノ繕キヲ称スヘ誠而名ノ凡雅
ナル岩苔針菖ノカタニモナク紅菖ト治ノヌカリモナキラ矣
松菖ノ名ヲ頃レテ花實ノ當用ヲ知ドナリ但レ作者ハ
歎ノ新深ニ佳ス吉川年ノ文士ナリ

